

<来週の聖書から>

村上 定幸

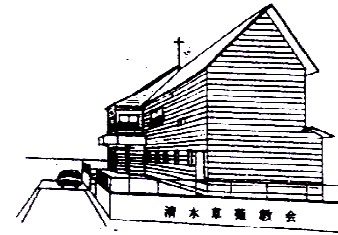
【主の僕】“私たちは、まず救われた者の群れ、贖われた者に与えられる希望によって生きている群れ”であることを、とことん前提にしなければなりません。説教の例話が楽しく要を得ているとか、倫理的に正しいことが語られるなどというのは、二の次三の次のことです。説教が慰めに満ちたものであるためには、徹底的に主が私たちを購われたことを語るしかありません。これらのことをパウロは“人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め（Ⅱテモテ4：3）”と語っています。受難週にあるこの時、イザヤ書にある“主の僕”の預言を味わい、イースターを更に恵あるものにしたいと思います。イザヤ書の、多少異なる理解もありますが42：1-4、49：1-6、50：4-9、52：13-53：12には“僕の歌”と呼ばれた箇所があります。来週はこの最後の四番目の“僕の歌”が開かれます。

【メシヤ】それではこの僕って一体、誰なんですか。身代わりの苦難と死による執り成しが描かれるのです。先にノアの箇所では私たちが学んだことを思い出しましょう。“あなたたちの命である血が流された場合、わたしは賠償を要求する。いかなる獣からも要求する。人間どうしの血については、人間から人間の命を賠償として要求する（創世記9：5）”という箇所です。人が神から与えられた正しさを行わず、犯した罪によって、人らしく生きる事が出来なくなってしまったのです。聖餐のたびに告白することですが、“犯した罪に耐えることは出来ないのです”。集団的な者0であったか、個人であったか、いろいろと解説がなされていますが、その働きは、栄光に輝くメシヤではなく、人々の罪を取り除く、贖罪のメシヤです。主イエスの働きによってこのことが成就したのです。神は御子をこの世に降し、解決の道を失っていた人々の罪を贖い、私たちを罪から救われたのです。私達には持ち合わせのないその正しさが、私たちの罪と交換されたのです（ウェスリの表現）。

【贖われたことを喜ぶべきなのです】受難日からイースターへと教会のカレンダーは進んでいきますが、私たちは、本当に、主がかつて私たちのために贖罪の死を遂げられ、復活されたことを信じているのか思い出してみるのもよいと思います。“聖書に書いてあるから語るが、別世界のこと”のように聞こえたり、それは“ただの教えや、私たちの毎日を整えるためのものである”かのように語ってしまわれてことが多いのです。もし、卵の色は気にしても、正しいものとしての出発点が与えられたのだという、喜びがなかったら、ただの祭りになってしまいます。先週私達は納骨式を行いました、その先に復活のあることをどれだけ語ったことが出来たでしょうか。ただただ葬ることを行っても、実はその先に復活と贖われた者の生活があると語られなければ、教会は悲しみの場所になります。

週報

2012年 3月 18日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリースタジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

振替口座 00890-6-214042